

『禪門寶藏錄』譯註

譯  
柳田聖山

註  
西口芳男

第  
一  
部  
  
譯  
註  
篇

〔序〕天頌	一	〔二三〕一味相沈	七六
〔一〕迦葉傳心	一二	〔二四〕難文字法師	八〇
〔二〕拈花微笑	一八	〔二五〕開青蓮目	八四
〔三〕海底風影	二二	〔二六〕達磨對楊銜之	八七
〔四〕真歸祖師	二七	〔二七〕神清不喜禪	九一
〔五〕惠能說法	三五	〔二八〕如來清淨禪	九八
〔六〕卅三密授	四一	〔二九〕律師法師禪師	一〇九
〔七〕三教三輪	四六	〔三〇〕教外豎禪	一一五
〔八〕按智度論	五六	〔三一〕引古下今錄	一二九
〔九〕禪化主佛	五九	〔三二〕無舌土論	一四〇
〔一〇〕教外別傳	六四	〔三三〕無染國師	一五〇
〔一一〕法寶袈裟	六七	〔三四〕梵日國師	一五二
〔一二〕說弓說絃	七二	〔三五〕重峰祖師澄觀	一六一

[二六]	西山亮座主	一六五	[四〇]	源律師問	二四六
[二七]	良遂座主	一七一	[四一]	講花嚴志座主	二四九
[二八]	大原季上座	一七六	[四二]	有法師問	二五四
[二九]	印宗法師	一八一	[四三]	三藏法師問	二六三
[三〇]	無業禪師	一八六	[四四]	德山宣鑑	二六九
[三一]	洪州法達	一九一	[四五]	仰山行偉	二七七
[三二]	清涼澄觀	一九七	[四六]	法雲圓通法秀	二八八
[三三]	花嚴院繼宗	二〇九	[四七]	吳中講僧	二九五
[三四]	講花嚴僧	二一六	[四八]	善華嚴問	三〇一
[三五]	西蜀首座	二二二	[四九]	西蜀鑿法師	三二七
[三六]	小師洪諲	二二八	[五〇]	智遠僧統	三三二
[三七]	講僧來問	二三三	[五一]	西天異見王	三三二
[三八]	欲界無禪	二三七	[五二]	魏明帝問	三三七
[三九]	律師法明	二四〇	[五三]	梁武帝問	三四三

〔五四〕 中印度國王迦勝	三四九	〔六八〕 龐居士蘊	四二九
〔五五〕 唐憲宗皇帝	三五七	〔六九〕 張拙秀才	四三四
〔五六〕 唐宣宗皇帝	三六一	〔七〇〕 范文粹居士	四四〇
〔五七〕 同光帝問	三六八	〔七一〕 大史黃庭堅	四四二
〔五八〕 宋眞宗皇帝	三七二	〔七二〕 內翰蘇軾	四五〇
〔五九〕 宋仁宗皇帝	三七五	〔七三〕 張天覺無盡居士	四五七
〔六〇〕 宋高宗皇帝	三七九	〔七四〕 左丞范冲	四六三
〔六一〕 宋孝宗皇帝	三八二	〔七五〕 中丞盧航	四六七
〔六二〕 高麗太祖神聖大王	三九〇	〔七六〕 侍郎張九成	四七〇
〔六三〕 期城太守楊銜之	四〇八	〔七七〕 禮部侍郎楊傑	四七四
〔六四〕 唐韓文公愈	四一二	〔七八〕 楊文公億	四七九
〔六五〕 唐裴休相國	四一六	〔七九〕 清獻公趙抃	四八五
〔六六〕 朗州刺史李翱	四二〇	〔八〇〕 歐陽脩	四八九
〔六七〕 王常侍參睦州	四二四	〔八一〕 丞相王隨居士	四九九

〔八二〕	曾學士會	五〇四
〔八三〕	李資玄居士	五一〇
〔八四〕	無著道人尼妙總	五一六
〔八五〕	范縣君寂壽道人	五二二
〔八六〕	俞道婆	五二六
〔跋〕	李混	五三三

## 禪門寶藏錄序

羌夫我迦文老人、禪燈點迦葉之心、教海瀉阿難之口。則禪之與教、異日導也決矣。而職教者、聞教外別傳之說則面青眼白云、惡、是何言歟。噫、人我之大、一至於斯也。故走慨然賈勇、不揆蠡測管窺、而以三門質之。三門者何。混濫者禪教也。故上之卷、立禪教對辨門。毀謗者諸講也。故中之卷、立諸講歸伏門。流通者君臣也。故下之卷、立君臣崇信門。此三門所引、皆古重言也。非臆說也。非臆說則人信之者、儻有焉。目之爲禪門寶藏云。海東沙門內願堂眞靜大禪師天頤蒙且序。至元卅年癸巳十一月日也。

\*

羌夫我<sup>それ</sup>が迦文老人は、禪燈を迦葉の心に點じ、教海を阿難の口に瀉ぐ。則ち禪と教と日を異にして導<sup>と</sup>く也決せり。而して教を職とする者は、教外別傳の說を聞けば、則ち面青眼白して云く、惡<sup>あゝ</sup>、是れ何たる言か。噫<sup>あゝ</sup>、人我の大なる、一えに斯<sup>こゝ</sup>に至れり、と。故に慨然として賈勇に走り、蠡測管窺を揆らず、而して三門を以て之を質<sup>た</sup>す。三門とは何ぞや。混濫する者は禪と教なり。故に上の卷には、禪教對辨門を立つ。毀謗する者は諸講なり。故に中の卷には、諸講歸伏門を立つ。流通する者は君臣なり。故に下の卷には、君臣崇信門を立つ。比の三門の引く所は、皆な古の重言なり。臆說には非ず。臆說に非ざれば則ち人の之を信ずる者、儻<sup>あるい</sup>は焉れ有らん。之を目して禪門寶藏と爲すと云う。海東沙門內願堂眞靜大禪師天頤蒙且序。至元卅年癸巳十一月日也。

\*

## 禪門宝蔵録の序

そもそも我らのお釈迦じじいが、禪の灯火を迦葉の心（臓）にともし、海のようなテキストを、阿難の口の中に流し込んだ以上、禪とテキストとを、日時を分けて導いたのは、決定的なことだ。

そこで、テキストを専門にするものは、教外別伝（テキスト以外に、格別に伝えたもの）という話をきくと、たちまち顔色をかえ、眼を白黒させていうのである。ああ、これは何たることぞ。まことに始末におえぬ我見というもの、こういうことになるほかはない。

そこで、いきりたつ勇氣にまかせ、貝殻で大海の水をはかり、葦の髄から天をのぞく、何とも無謀な手だてながら、（私は）三つの部門に分けて、問題をあきらかにする。

三つの部門とは、何のことか。

混同されているのは、禪とテキスト（のちがい）ということだ。だから、上巻には禪とテキストの対話という部門をたてる。

あしざまに（相手を）非謗するのは、うるさがたの講師である。そこで、中巻にはうるさがたの講師が、降伏する部門をたてる。

禪とテキストを（世の中に）ひろげるのは、君臣の仕事である。そこで下巻には、君臣が（禪とテキストを）敬いほめる部門をたてる。



これら三つの部門に、(夫々に)とりあげたのは、すべて古人の大切な証言であつて、(私の)勝手な意見ではない。勝手な意見でなければ、誰もこれを信頼すること、むしろ当然であろう。この本を名づけて、禪門宝蔵(録)とする次第。海東の出家修行者、内願堂に出仕する真靜大禪師、天頤が、勅を蒙つて急ぎ序文をかき。至元三十年癸巳のとし、十一月のある日のこと。

\*

○迦文老人ニ釈尊のこと。迦文は釈迦文仏の略。『円悟語録』卷一六法語下「示宗覺大師」、「迦文老人、久默斯要」

(T四七—七八b)。

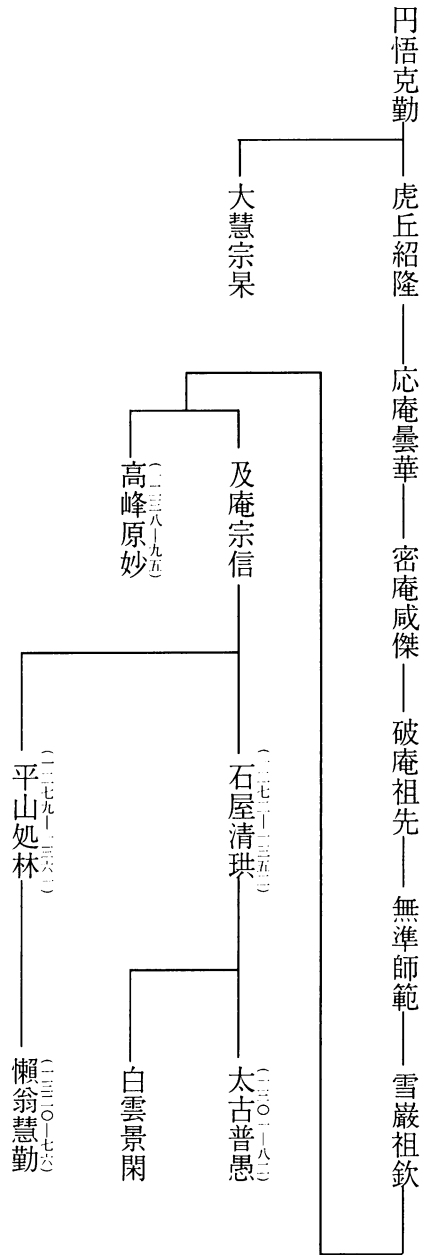
○禪燈點迦葉之心、教海瀉阿難之口ニ『白雲和尚語録』卷上「禪教通論」にいう、「我が本師、釋迦牟尼佛は、末後に於て靈山會上に花を拈りて衆に示さる。百萬億の大衆は、悉く皆な措おく、唯だ大迦葉のみ破顔微笑す。世尊云く、吾に正法眼藏涅槃妙心有り、摩訶大迦葉に付囑す、と。又た云く、教海を阿難の口に瀉ぎ、禪燈を迦葉の心に點ず、と。首め迦葉に傳え、以て初祖と爲す。此を以て西天の四七、東震の二三、轉轉相承承け、燈燈相繼ぐ。皆な是れ釋迦如來の弟子なり。今に至るまで唯だ本師の語を以て徒衆に訓示するは、言に因りて道を證し、法を見て宗を明らめ、外に馳求せしめず、親しく佛意を傳え、佛種を紹隆し、祖位に即入せしめ、教を以て指南と爲せばなり。豈に禪教の別有らんや。然れば佛語心を宗と爲し、無門を法門と爲す。則ち教は是れ佛語なり、禪は是れ佛意なり。然れば諸佛の心と口とは、必ずしも相違わず。則ち佛佛手授して斯の旨を受け、祖祖相傳えて此の心を傳う。各おの名句に隨えば、差殊有るに似たれども、當に知るべし、禪と教とは名異なりて體同じくして、本來

平等なることを。平等なるに何の故ぞ、至人は機に隨いて教を説き、則ち權實頓漸の殊を分かつは。達士は理に契いて言を忘ずれば、則ち豈に佛と祖、禪と教の異有らんや。故に云う、之を口に登せば之を教と謂い、之を心に傳えれば之を禪と謂う、と。其の源に達する者は、禪無く教無し。其の派に列なる者は、禪と教に各おの執す。之に昧ければ則ち皆な失い、之に執すれば則ち兩つながら傷つく。融かして之を通せば則ち通ぜざる無く、決して之を正せば則ち正しからざる無し。正邪は唯だ人にのみ在り。但だ一念機を迴らすを得れば、自然に萬法俱に泯び、了に禪と教の別無し。然れども此れは是れ佛事門中の施設なり。若し衲僧門下に據れば、本來佛無く衆生無く、名無く相無く、蕩蕩焉たり恢恢焉たり、廻かに思議の表を出ず。什麼を喚んでか禪教と作さんや」（『韓国仏教全書』第六冊、六五四頁）。

また白雲和尚抄録『仏祖直指心体要節』卷上にいう、「譜に云く、教海を阿難の口に瀉ぎ、禪燈を迦葉の心に點ず。故に迦葉、阿難を召す。阿難應喏す。迦葉云く、門前の刹竿を倒却着よ。私に曰く、二尊並び化せず。喚ぶ處分明、應う處眞なり。个中こちゆうに色聲言語を具す。最初の禪なり」（『韓国仏教全書』第六冊、六〇五頁）。さらに覺雲『拈頌說話』卷三、「金欄」の項に、「古云……」として引かれている（同書第五冊、八八頁）。

白雲、名は景閑、古寧郡（全羅北道）の人。幼くして出家し道を求めた。一三五一年、元にあつて指空に謁し、湖州霞霧山天湖庵の石屋清珙に参じ、諸山を巡礼し、一三五二年正月、再び石屋に参じて無心無念の真宗を密契するや帰国し、翌年（一三五三）孟春、端坐して冥然の地に到り悟道した。更に一三五四、石屋の辞世頌を寄せられたのを読み、法を遺囑されたことに感激している。一三六五年、懶翁の推薦により海州の神光寺の住持となり、その後、年七十七にして、鷲巖寺に示寂した。『白雲和尚語録』は一三七七年の李玖の序、一三七八年の李穡（一三二八—一九九）の序を有し、白雲示寂後、しばらくして開版された。なお白雲の生卒年については、江田俊雄氏は一

二九七—一三七三年と推定され、高橋亨氏は一二九八—一三七四年とされている。江田俊雄「高麗版白雲和尚語録に就いて」（『朝鮮仏教史の研究』所収、国書刊行会、昭和五二年）、高橋亨「白雲和尚語録解題」（京城帝国大学法文学部、影印本『白雲和尚語録』所収、昭和九年）を参照。  
法系は次の通り。



○禪之與教、異日導也決矣。『伝法正宗記』卷二の末尾の評にいう、「佛の傳うる所の心印と餘の三昧とは宜しく日を異にして導くべし」（T五—七二五b）。

○教外別傳（六）の注を参照。

○面青眼白。面青は驚き恐れて、血の気が引くさま。眼白は鄙薄厭悪の眼つき。『碧巖録』三二則・本則の評唱にい

う、「臨濟一日衆に示して云く、赤肉團上、一無位の真人有り。常に汝諸人の面門より出入す。未だ證據せざる者は看よ看よ。時に僧有りて出でて問う、如何なるか是れ無位の真人。濟便ち擒住して云く、道え道え。僧擬議す。濟便ち托開して云く、無位の真人、是れ什麼たる乾屎橛ぞ。便ち方丈に歸る。巖頭覺えずして舌を吐く。欽山云く、何ぞ無位の真人に非ずと道わず。定（上座）に擒住され、無位の真人は無位に非ざる真人と、相い去ること多少ぞ、速あ道え速あ道えと云われ、「欽）山語無く、直に面黄面青なるを得たり」（T四八一七一一c）。『晋書』列伝第一九・阮籍伝、「禮教に拘われず、能く青白眼を爲す。禮俗の士を見ては、白眼を以て之に對す」。

○惡、是何言歟』『孟子』公孫丑章句下、「燕人畔く。王曰く、吾れ甚だ孟子に慙ず。陳賈曰く、王、患うること無かれ、王自ら周公と孰れか仁且つ智なりと以爲うや。王曰く、惡、是れ何たる言ぞや」。

○人我』人我の見。自己中心主義。『証道歌』、「是れ山僧が人我を逞しくするにあらず、修行は恐らく斷常の坑に落ちん」（T四八一三九六c）。『臨濟録』示衆、「你解得すれば、即ち他人を輕懷す。勝負の修羅、人我の無明は、地獄の業を長ず」（T四七一五〇二c）。

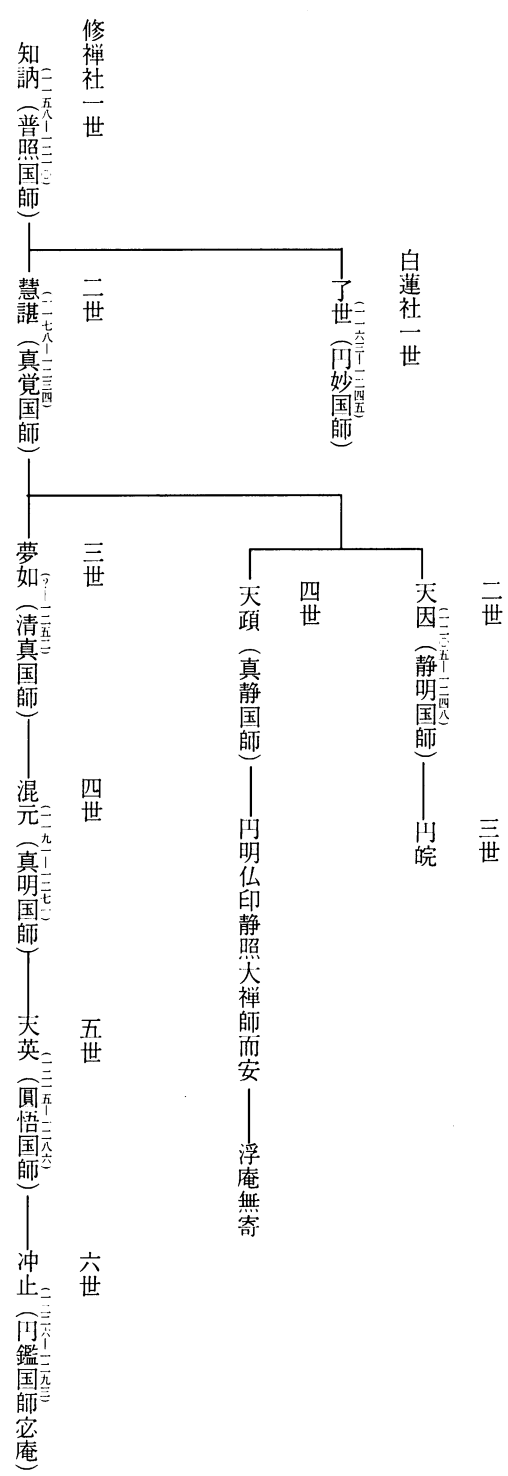
○走慨然賈勇』「走」は自称の謙詞として、「走慨然として賈勇し」とも読める。賈勇は勇氣を奮い起すこと。『全唐詩』三・明皇帝（玄宗）「觀拔河俗戲」詩、「壯徒は恒に賈勇し、拔距して長河に抵る」。

○蠡測管窺』『漢書』卷六五・東方朔伝、「管を以て天を窺い、蠡を以て海を測る」。

○内願堂』宮城に設けられた王室のための願刹。内願堂主が置かれて祈禱が行われた。『高麗史』忠肅王五年十月の条、「靈寶道場に内願堂を親設す」。

○眞靜大禪師天頤蒙且序』「蒙」は読みにくい。「蒙」だけで「勅を蒙むる」の意には取りにくい。「蒙且」を名と見るのが普通。「且」は宝永七年（一七一〇）の江戸木活本及び続藏經本では「旦」に作る。『東師列伝』卷一に

いう、「師の名は天頌、字は天因、内願堂と號す。姓は申氏、本と奕世卿相の子なり。二十にして登第し、文章は一世に震耀す。而るに一朝に金陵の萬徳山白蓮社に出家し、蓮律に落髮し、鉢を圓妙（了世）に受く。晩年襲いて國師と爲り、白蓮社に移りて龍穴庵に住す。人、龍穴大尊宿と稱す。元の順帝の至元三十年癸巳十一月、禪門寶藏録三卷を撰す。又た禪門綱要一卷、傳弘録四卷、世に行なわる。麗朝、眞靜國師と贈諡し、八國師の第四世と爲る。弟子は釋教都僧統覺海圓明佛印靜照國師、孫は浮庵無寄大禪師なり。燕谷住輪山の北庵に住す。本朝の丁冽水、序文を作り贊を作る。塔を杲庵マヤと曰う。文集二卷四篇、世に行なわる」〔『韓國仏教全書』第十冊、一〇〇四頁〕。修禪社との關係を考慮した法系図を示すと次のようになる。



『万徳寺志』卷一・真靜國師伝及び『東師列伝』により、『宝蔵録』の著者は白蓮社四世の天頌とされてきたが、高翊晋「白蓮社思想傳統と天頌の著述問題」（東国大学仏教文化研究所『仏教学報』第一六輯、一九七九年）は、『東師列伝』の伝が白蓮社二世・四世の天因と天頌、及び『宝蔵録』著者の三者を混同していることを指摘し、更に①『万徳寺志』の杜撰性、②「眞淨」と「眞靜」の差異、③年代の問題、④龍穴と鶯谷の差異、⑤『宝蔵録』の思想内容、⑥天頌以後の白蓮社の伝統の六項にわたって同名異人説を論じた。これより以前、既に高橋亨「白雲和尚語録解題」の中で、「禪門宝蔵録撰者攷証」に於て次のように異人説を唱えている。

本書の撰者に就きては從來天台宗師眞靜國師天頌を以て之に當つ。予の觀るに及べる本書には二種あり。其一は萬曆三十九年辛夏智異山能仁庵刊に係り、禪門綱要と合本なり。其二是隆熙二年東萊梵魚寺刊本にして亦禪門綱要と合本なり。然るに康津萬徳寺志卷一に據れば、外に嘉靖十年晉州智異山鐵窟庵開刊の古本ありといふ。亦同内容同體裁なるが如し。是等二種本を通じて撰者の自序と有名なる信佛文臣蒙庵居士李混の跋とあり。其の自序の末尾に小字以て註の體裁にて海東沙門内願堂大禪師天頌蒙且序至元三十年癸巳十一月日也と記し、又開卷第一張にも海東沙門天頌撰と誌す。李朝僧梵海の編と稱する東師列傳卷二眞靜國師天頌傳にも禪門寶蔵録三卷・禪門綱要一卷・傳弘録四卷を撰すとあり。斯くて今尚朝鮮僧界本書を以て天頌の撰となして疑はず。然るに是に就いて種々の疑問あり。予は天頌の撰にかゝるものには非ずとなす。

第一に。李混の跋文には撰者を以て今の内願堂鶯谷住老呆庵大禪師翁と稱し眞靜とも天頌とも謂ふことなし。第二に。本書は禪教對辨門、諸講歸伏門、君臣崇信門の三門より成り。純禪宗の立場より他教宗に對辨せるものなり。然るに眞靜國師天頌は朝鮮天台宗根本道場康津萬徳寺白蓮社第四世にして天台宗に屬す。縱令兄弟子天因と俱に曹溪の無衣子即ち松廣寺第二世眞覺國師慧謹に參せりと雖、其の宗學の天台一乘に在りて法華經の奉持者

なること疑なし。天台宗師として斯くの如き揚禪貶教の書を撰すること尤もあるべからず。且つ本書は主として華嚴宗を對象として辨せられし如きも、卷上には鑑昭禪師の引古辨今録を擧げて法華を禪の下におき、又卷中に祖燈録を引きて洪州法達師の念法華三千部の益のなきを謂へるあり。斷じて天台宗師の撰と觀るべからず。第三に。眞靜國師天頌の集湖山録なるもの今大半湮滅し予も未だ寓目するを得ざれども、其の殘存部を觀るに及べる萬徳寺志に據れば、國師の著は湖山録四卷、海東法華傳弘録及室薄録の三種にして本書及禪門綱要を擧ぐることなし。

第四に。東文選卷百十七崔滋の萬徳山白蓮社圓妙國師碑銘及東文選卷八十三林桂一の萬徳山白蓮社靜明國師詩集序に據れば、天頌（俗名申克貞、時に進士）は高宗十五年戊子夏五月同志二名と共に萬徳山に來りて圓妙の門徒となり、十九年壬辰夏四月共に此に普賢道場を結べり。而して天頌は爾後四十年此處にありて修法説教せること彼の答芸臺直監閔昊書に詳なり。曰く

自是世出世首鼠之心一刀兩段。切欲從浮圖氏誦妙經修妙行。忿々未暇辨嚴。幸得同志者二人潛發啓行於千里。道途艱險備嘗。計月餘旬日始參所謂萬徳山。地僻人稀寂無來往。但見雲岑烟島掩暎蒼茫。修竹清溪可邀可賞。唯厯眉老衲四五輩出門笑迎。遂居稻田傳相譯述。水邊林下長養聖胎。象外壺中揩磨道眼。始立普賢道場弘揚開顯佛乘。力行前代之不行。使覺後人之不覺。今四十年矣。

此に同志二人といふは林桂一の序文にいふ天因と許迪を指すなり。是書を草せる時は元宗十三年にして恐らく天頌は白蓮社主たりしなるべし。但し此間に於て高宗三十一年甲辰より暫時尚州四佛山東白蓮社を董せることあり。而して白蓮社初祖圓妙國師了世は高宗三十二年乙巳歸寂し、之に代れる二世靜明國師天因は高宗三十五年戊申遷化し、法弟圓院嗣ぎて第三世となり、院寂して天頌繼ぎ第四世となる。天因は寂時四十四歳なり。而して前述

林桂一の序文に

國師諱天因系出朴氏、燕山郡人也。弱齡穎悟博聞強記以能文稱。舉秀才入賢關。以直赴第一生失意。春官士林皆爲歎惜。即謝世、與同舍生許迪前進士申克貞拂衣長往。抵萬德山參圓妙國師。

とありて天因と天頤（申克貞）とは略ぼ同輩なるを證す。果して然らば若し天頤が本書の工成りし忠烈王十九年癸巳まで猶生存せりとせば、天因と同甲ならば八十九歳となる。是の如き高齡を以て到底此の編撰を成すべしとも思はれず。況んや又都塵に染みて宮仕して内願堂主たることをや、若干歳少しとするも尚然り。

第五に。白蓮社主第二世天因戊申に叙して圓院之に嗣ぎ、圓院遷化して然後天頤第四世となる。當時白蓮社規にありて社主は歿する迄在職すること、なせりと思はるるが故に、若し忠烈王十九年天頤内願堂主鷲谷寺住持たりしならば圓院は其年まで四十三年白蓮社主たること、なり、是事不可能なり。加之ならず本書の李混の跋文によりても鷲谷寺は禪宗に屬すと思はるるが故に、天頤が白蓮社主たるの間若くば社主たる前に於て是寺に住持たりし事は到底考ふること能はず。

以上五條の理由に因り本書は白蓮社第四世眞靜國師天頤の撰に係るものにはあらずして忠烈王十九年頃求禮鷲谷寺住持を以て内願堂主たりし呆庵大禪師の撰する所と斷定せざるべからず。而して其の誤りて眞靜國師撰と傳へらるゝに至りし理由は、呆庵の法諱の亦天頤なりし爲か、或は呆庵の法號眞靜大師なりし爲かの一に歸せざるべからず。而して予は恐らく後者なるべしと想像す。天頤の諱は甚稀罕にして他に復たあるべしとも思はれず。又東文選には天頤の詩を載せて釋眞靜と署せり。法號の眞靜は甚だ普通なり。然るに同じ眞靜なる白蓮社主第四世眞靜國師天頤のあまりに有名なる爲後世に至り呆庵を以て天頤に當て、遂に何人かが縦まゝに序文の終に海東沙門天頤撰と記入し、其書嘉靖十年鐵窟刊行の元本となるに至れるものなるべし。呆庵禪師の事蹟に就いては予の



狭聞なる未だ知る所あらず。禪門寶藏録と合本にて行はる、禪門綱要も亦天頌の撰ならざるは勿論なり。或いは好みて是種爛葛藤を弄する李朝初期の禪僧の作ならざるか。

最近では、蔡尚植『高麗後期仏教史研究』（潮閣、一九九一年）において、一然に嗣いだ宝鑑国師混丘（二二五—二三二）こそ内願堂真静大禪師天頌であるとする説が発表されている。